巻頭エッセイ　教えること、教わること。

造形教室時代のこと

作家　きむら　ゆういち

ボクは、学生の頃から自分の作品を創ってメシが食えるようになりたいと思っていました。でも、好きなことでメシを食うのはなかなか大変だと考え、子どもの造形教室を始めました。

大学卒業と同時に始めたのですが、週に一回だけのこの教室は、その後、会社に二度勤め、フリーになり、独立した事務所を作ってからも続け、気がついたら二十三年間もやっていました。

”チャイルド・アートセンター“と名付けたこの教室では、お絵描きから工作、料理、凧揚げ、人形劇、楽器作りと演奏、シルクスクリーン、陶芸、アニメーション作りまで、何でもやりました。対象は、三才から小学六年生までです。

”自分の作品“を創ってメシが食えるようになりたいと思っていたボクの”自分の作品“が、子ども向けのものになっていったのは、この教室を続けていたからだと思います。

二十三年間も教え続けていたのですから、逆に、子どもたちから教わったことも数々あります。

この教室では、子どもたちに、できるだけ自由に作ってもらうことをテーマにしていました。しかし、自由にと言っても、最低限の科学原理を知らなくては自由に作れません。そこで、ひとつの原理をテーマにして作る日を何回か続け、その後に自由工作の日を設定しました。

その日は、ありったけの家のガラクタを集め、好きなものを作ることにしました。みんな、作るのが大好きな子どもたちですから、すぐに次次と作り始めます。

ところが、五才のキエちゃんという子だけが、いつまでたっても作りません。ボクや、他の助手の先生がかわるがわるキエちゃんの所に行って、「ねえ、キエちゃんも何か作ろうよ。先生も手伝うからさ。」と、言ったのですが、彼女は「ううん、いいの。」と首をふって、何も作ろうとしません。

主催している先生としては、困ってしまいました。

「う〜む、月謝はもらってるし、お母さんは迎えにくるし、何も作ってないとなあ〜。」

そんな時、ふいに小学三年生のまゆちゃんという子が、

「あたしが行ってあげるよ。」

と、気軽にそう言って、キエちゃんの所に行きました。そして、キエちゃんに何かひとこと言ったのです。すると、どうでしょう、すぐにキエちゃんは、汽車を作り始めたではありませんか。何人もの先生が行ってもダメだったのに、まゆちゃんのひとことで作り始めたのです。

ボクは、何て言ったのか、まゆちゃんにそっと聞きました。

すると、まゆちゃんは

「うん。汽車を作るんだけど、手伝ってって言ったの。」

と言ったのです。

う〜む、なるほど。先生は「手伝ってあげる。」と言い、まゆちゃんは「手伝って。」と言った。同じようだけど、言われるほうは違う。

まず、”手伝って“のほうが気楽に参加できる。”手伝って“のほうがプライドをくすぐられる。そして、結局は二人で作るのだから、”手伝って“も”手伝ってあげる“も、行動は同じ。もちろん、年上のほうがたくさん作るのも同じ。子どもに、上からの目線で”手伝ってあげるよ“と押しつけるより効果的なんだ。

ボクは、三年生のまゆちゃんに、ひとつ教えてもらった気がして見ていると、二人で作っているその汽車は、いつのまにか正面に”キエちゃん号“と書いてありました。そして、キエちゃんの立派な作品として、大喜びで迎えにきたお母さんと持って帰ったのです。

この教室を始めた頃、先生は二人でした。もう一人は大学時代の友人の女性です。

ある日彼女が、子どもたちが全然言うことを聞いてくれないと、こぼしたのです。

ボクが、「え？　みんないい子なのに。」と言うと、それはボクのいる時だけで、ボクが休んだ日は違うと言うのです。

彼女が子どもたちに、「静かにして。」と何度も言うと、子どもたちは全員、自分で口にガムテープをはって、んーんーと声を出して先生をからかうと言うのです。

それを聞いて、ボクは笑ってしまいましたが、子どもたちは、その先生を見て、限界までわがままをするんだなと分かりました。

子どもたちは、環境や、権力を持つ人間にとても敏感なので、一方向だけでは判断できない面があります。でも、それは子どもだけではありません。人間は、皆そうなのではないでしょうか。

子どもはプリミティブだから、人間のそういう本質が分かりやすいだけで、大人も子どもも同じだと思います。ですから、子どもを見て、子どもから教えてもらうほうが、人間のことが分かりやすいのです。

子どもから教えてもらったことは、まだまだ限りがありません。なにしろ二十三年間もあるのですから。でも、それはきっとボクの作品に反映されていると思います。続きはぜひ作品のほうで。

きむら ゆういち
1948年東京都生まれ。「あらしのよるに」「きょうりゅうだぁ！」など多くの作品がある。1995年、「あらしのよるに」で講談社出版文化賞、産経児童出版文化賞を受賞。同作は、2005年にアニメ映画化され、人気を博した。